

人始原為

牛二小

新朝文庫



にせ げん し じん
偽 原 始 人



定 価 400 円

新潮文庫 草 168 F

昭和五十四年七月十五日 印 刷
昭和五十四年七月二十五日 発 行

著 者 井^い上^{うえ}ひさし

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番 号 一 六 二
東京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四二
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

偽 原 始 人

井上ひさし 著

新 潮 社 版

2541

目次

暗殺リスト	七
容子先生	四
毒薬泥棒	八
大監禁	一三
大脱走	一七
穴ぐらぐらし	二〇
札束狩	三九

解説 斎藤次郎
カッ ト 山下 肇

偽
原
始
人

暗殺リスト

このごろの、東京の郊外の国鉄の駅はみんな同じような作りになっているみたいだ。二百メートルはたっぷりある、長い、航空母艦のような建物、屋上が電車の出入りするプラットホーム、その下に切符売場や切符の自動販売機や改札口や商店街があって、そのまた下は半地下の駐車場、たいていの駅がこんな具合にできている。

ぼくらのところの駅もこれと同じ作りで、改札口を通るにはもちろん切符がなければだめだけど、ほかのところは自由に出たり入ったりできるし、朝から晩まで商店街をうろうろしていてもだれにも叱られない。

だからぼくらはいつも駅の中の商店街のカメラ屋の横のベンチに集合し、時間がくるまで、本屋でマンガ本や劇画本を立ち読みしたり、レコード売場で歌謡曲を聞いたり、おもちゃ屋で模型機関車を走らせたり、通路で追っかけっこをしたり、電機屋でテレビを見たりする。ぼくの家にもテレビぐらいあるけれど、勉強の邪魔になるというので、チャンネルはおかあさんががっちり握っている。だからテレビは商店街で見るとしかないので。

おながが空いたら、パン売場かサッポロラーメンの立ち喰いスタンドへ行く。お金のあるとき

はすし屋に入る。学習塾に払うお金の一部を小遣いにまわしているの、ぼくらはけっこう金持だ。それで三日に一度はきつとぼくらはすしをたべる。

商店街であまり長い間遊んでいるとやっぱりすしは飽きてくる。そんなときは入場券を買って改札口を通り、電車に乗る。このあいだなんか、入場券一枚で八王子まで行ってきた。こんどいつか、入場券で、名古屋か京都へ出かけようと思っている。でも、東京駅の新幹線の改札を通り抜けるのはむずかしそうだし、ひかり号の車内検札はすいぶん厳重らしいから、この計画が成功するかどうかはわからない。

時間がくると、駅前広場からバスで家へ帰る。が、玄関に入るときは忘れずに、

「ああ、今日も塾ですいぶんしぼられちゃったなあ」

なんて呟くことつぶやにしている。

「おかえりなさい、東大ちゃん。ほんとうにご苦労さま」

おかあさんはこういって出迎えてくれるけど、このときはやはりいい気持はしない。ぼくにもまだすこしぐらいは、例の「良心」というやつが残っているからだ。

ところでぼくの『東大』って名前だけど、これは『トウシン』と読む。どうしてもぼくに東大に入ってもらいたくて、おかあさんはぼくにこういう名前をつけたらしい。そしていまでは、東大と名前をつけただけではまだ心配で、塾に通わせている。

でも、ぼくは断言する。小学校五年一組三十五名中二十番か二十一番のこのぼくに東大はとも無理な相談だ。おとうさんは四十五歳で、ある銀行の、小さな支店の店長代理だけど、そのおとうさんが銀行の頭取に出世するよりむずかしいことなのだ。

夏休みに入ってから、ぼくは毎日、朝の八時に家を出る。小学校は休みになったけど、それまで二日に一回だった塾の授業が、夏期特別午前講習とかいうことで毎日三時間にふえたから、塾に通っているふりをしているぼくとしては、

「今日もがんばってきます」

なんて家を出なくちゃならないことになっているわけだ。

今日のぼくは、鞆かばんの中に一万八千円という大金を持っている。もちろん、これは怪しいお金ではない。ぼくが通っていることになっている「日の出学習塾」に納める七月二十一日から八月九日までの、夏期特別午前講習の授業料が一万二千元、七月二十七日と八月三日の二回の日曜に受けることになっている模擬試験受験料が三千元、教材費が二千元、塾の冷房代が千円、しめて一万八千円をおかあさんが出がけに持たせてくれたのだ。

バスを降りて駅の商店街の、カメラ屋の横のベンチへかけつけると、高橋庄平君と大泉明君がぼくを待っていた。

「おそいぜ、東大君」

庄平君はぼくの顔を見るとさっそく怒った声を出した。

「五分も遅刻だ」

「べつに怒らなくてもいいじゃないか」

ぼくは庄平君の隣に腰をおろした。ベンチは鉄製で、ピンク色に塗ってある。ところどころに、鉄の細棒を曲げてつくった花細工が飾りにくっついていて、なかなかしゃれている。ぼくらはこのベンチが気に入っていた。

「日の出学習塾にほんとうに通っているのなら遅刻だけど、じつはそうじゃないのだからさ」
「東大君は、なんにもわかつちやいないな」

大泉明君が庄平君越しにぼくに煙草の袋をさし出した。袋には「フィリップ・モリス」と印刷してある。ぼくは一本抜いて口にくわえた。煙草からはぶうんとチョコレート匂いがしている。「塾に通っていないからこそ、時間励行をモットーにしくちやいけないんだぜ」

明君は庄平君にも煙草をすすめながらいつものお得意の説教をぶちはじめた。

「東大君が遅れて家を出る。おかあさんが『遅刻しちゃう、うちの子が日の出学習塾の先生に叱られてしまう。前もって学習塾に電話しておきましょう』と、ダイアルをまわす……。こんなことになったらたいへんだぜ」

「そうだよ。ほんとうにたいへんなことになる」

庄平君が煙草を吸い煙を吐き出す真似をして、相槌あいづちを打った。

「日の出学習塾では東大君のおかあさんにたぶんこう答える。『池田東大君？ そんな生徒さんはうちの塾にはいませんが。ええ、たしかにこの四月に一度入学してはいますが、ひと月通っただけでやめてしまいましたよ』。……これでなにもかもばれてしまうんだ。これからは時間どおりに家を出るようにしてくれなきゃこまるよ」

「わかったよ」

ぼくは煙草の皮をむいて、中身のチョコレートをぺろぺろとなめた。

「さあ、それじゃあ例の袋を出してもらおうか」

庄平君がぼくに左手を、明君に右手をさし出した。

「ほら月謝袋だよ」

「うん」

うなずいて、明君とぼくは鞆の中から『日の出学習塾月謝袋』と印刷してある茶色の封筒を取り出した。袋の表には四月から二月まで十一個の枠、裏には三十個の枠が刷ってある。この袋に金を入れて出すと、塾の先生が枠の中に『日の出学習塾之印』という受領印をいくつかおして返してくれることになっている。だから受領印をもらい袋を家に持って帰れば、

「ああ、塾のハンコがおしてある。うちの子はちゃんとお金を払ってきたんだわ」と、おかあさんたちは安心するわけだ。

「よし」

庄平君はぼくの袋から一万八千円、明君の袋からも一万八千円、合せて三万六千円、お金を出すと、それを小さくまるめて明君の手に握らせた。

「ぼくは家へ帰って受領印をおしてくる。東大君と明君はそのあいだに、その三万六千円を郵便局に貯金してきてくれ」

じつは庄平君のおとうさんが、ぼくらの通っていることになっている日の出学習塾の塾長先生なのだ。そして庄平君のおかあさんが塾の代表者で、受領印はおかあさんが保管している。庄平君はこれから家へ戻り、おかあさんの隙をねらって、ぼくらの袋に受領印をおしてくるのだ。ほんとうに世の中ってうまい仕掛けになっているではないか。

「うまくやってこいよ」

ぼくは庄平君の背中を叩いてはげました。

「見つかったやだめだよ」

「だいじょうぶさ」

庄平君は袋をていねいにたたんでジーンズのお尻のポケットにおさめた。

「受領印をちよろまかしてくるのはぼくの任務だものな。任務はちゃんとやりとげてくるさ。でないといけないち、ぼく、肩身がせまいだろう」

庄平君は、自分の家が学習塾だから、よそへ勉強に行くわけにはいかない。「学習塾へ行きたい」などといい出したら「じゃあ、うちの塾で勉強なさい」となるにきまっているからだ。自分の家の生徒では、月謝袋も貰えないし、ましてその袋のなかにお金を入れて貰うわけにもいかない。だから、庄平君はぼくらの「仲間」の一員だけど、お金を出すことができない。庄平君が「肩身がせまい」といったのは、つまりそういう意味だ。でも、庄平君が「肩身がせまい」というたびに、明君とぼくは、

「庄平君には水くさいところがあるなあ」

と、残念に思う。だって庄平君が日の出学習塾の長男だからこそ、受領印をちよろまかしてもらえるのだし、もうひとつ、だからこそ、学習塾は五月にやめていても、塾生のふりをしているのだし、塾で勉強せずにすんでいるのだ。つまり、五分と五分じゃないか。

「じゃ三十分後にまたこのベンチで落ち合おうぜ」

庄平君は、通路を出口の方へ、のそのそと歩きだした。庄平君は小学五年生なのに中学二年生といてもおかしくないぐらい大きな身体からだをしている。だから歩くときはまるで熊みたいに見える。朝の商店街の通路は通勤の人たちでとても混んでいる。その人ごみの中に庄平君の大きな背中

が消えた。明君とぼくはベンチから立って隣のカメラ屋に入った。

「あら、おはよう」

店の床をモップで拭いていた昌子ねえさんが、ぼくらの顔を見てにっこりした。

「いよいよカメラを買う気になったのね」

昌子ねえさんは高校生だ。昼間はカメラ屋で働き、夕方からは学校へ行く。夕方の四時には店を出るので、その分だけ朝の出勤が早いのだ。美人でもないけど不美人でもない。桜田淳子に十日間芋ばかりたべさせたら昌子ねえさんみたいな身体つきになるかもしれない。つまり、ぼくは、昌子ねえさんはすこし肥っているかもしれないってことをいいたいわけだ。

「カメラはまだです」

ぼくは右手を昌子ねえさんに差し出した。

「通帳とハンコ、ちょうだい」

「でもそのうちきつと買うからね」

そばから明君が弁解した。

「昌子ねえさんの親切は決して無にはしないよ」

日の出学習塾におさめるお金をぼくらは「真坂時太郎」という名前で郵便局に貯金をしている。その貯金の通帳とハンコを昌子ねえさんに預ってもらっているのだ。もちろん、これは用心のためだ。おかあさんはときどきとんでもないときに、鞆をさかさにして振ったり、机の引き出しのなかを探ったり、ズボンのポケットを引っくり返したりして、持ち物検査をする癖がある。通帳やハンコを自分で持っているところの検査に引っかかってしまうから、あぶないのだ。それで、カ

メラを買う金をためている、ということにしてカメラ屋の女店員さんに預かってもらっているわけだ。むろん、昌子ねえさんのことは（悪いけど）調べてある。家はどこなのか、おとうさんはどんな仕事をしているのか、性格や成績はどうか、全部ぼくらの手できちんと調べあげてあるのだ。だって持ち逃げでもされちゃたいへんだもの。

ぼくらの調査したところでは、昌子ねえさんの家は駅から歩いて十五分の六所神社ろくしょの横、おかあさんはいなくて、おとうさんは詩人（歌謡曲の詩をつくる詩人ではなくて、なんだかよくわからない難しい詩をつくる詩人だ。歌謡曲の詩をつくれればいいのに、そうすればお金がどっさり儲もかって、昌子ねえさんもアルバイトなんかなくてすむのにと、ぼくらは調査中に思ったものだ）、性格も成績もとってもいいみたいだ。

「はい、通帳とハンコ」

昌子ねえさんは店の奥のロッカーからビニールの、小さな風呂敷に包んだものを出してきた。「たしかに渡したわよ」

札をいって、明君とぼくはカメラ屋を出た。ベンチに戻って、包みをほどこいて通帳を出した。現在高五万六千円。

「ひゃあ、真坂時太郎氏は大金持だなあ」

明君はにこにこしている。むろん、ぼくもにやっとなった。五月、六月、七月の三カ月で五万六千円とは、ぼくらもずいぶん貯め込んだものだ。

それから明君とぼくは、駅前広場を横切って、大通りの、消防署の向いの郵便局へ行き、窓口に通帳とお金をさし出した。

「ありがとうございます」

窓口の若い女の人とはとてもいねいな声を出してぼくらの通帳とお金を受け取った。でも相手が小学生だと気づいて急に突っけんどんになって、

「向うで待ってなさい」

と、土間の隅の木製のベンチへ顎^{あご}をしゃくった。

「どう思う、この人の態度」

ぼくはわざと明君にきいた。

「欲求不満なんでしょうね」

明君が答えた。窓口の女の方はぼくらがベンチに腰をおろすまで、いやな目つきでぼくらを睨^{にら}んでいた。

「ところでさ、明君、きみ、関東プリント学習社の学習プリントをどうするつもりだい」

ぼくは鞆の中からガリ版刷りの問題用紙を出しながら、明君にきいた。

「こんなに難しい問題、ぼくらにはどうして解けやしないぜ」

プリント学習は、家庭教師や学習塾とはまた別口の、ぼくらの厄介の種だ。毎週きまった日にプリント学習社がぼくらの家へ、国語二枚、算数二枚、社会科一枚、理科一枚、計六枚の問題用紙を配り、前の週に配った問題用紙を持って帰る。そして、次の週になると、また新しい問題用紙を配りながら、前の週に持って帰った問題用紙を返してよこす。返ってきた問題用紙の、できないところには正しい答が書いてあり、それがプリント学習の仕組みだけど、月謝が千八百円、家庭教師を雇ったり、塾に行かせたりするのにくらべるとぐんと安上りだから、ぼくらのまわり